

仲間と学びを深める教育環境

～学んだことを共有する構成活動を通して～

矢出 大介

学校は、将来、みんなで力を合わせて社会生活を形成できる人間を育て、そのような共同的な活動に参加して、社会に貢献するために必要な能力が育つように学習活動を経験させる場だと考える。本論文は、学んだことを共有する構成活動を通して、仲間と学びを深めることを研究している。学びを共有するための工夫として、子どもが意欲的に学びに向かうためと考えた。「ひと・もの・こと」との出会いを計画的に取り入れた。それにより子どもたちから多面的な学びが生まれる。その学びを構成活動や対話を通して共有する手法を取り入れた。このことにより、肯定的に認めあえる仲間関係を実感し、その仲間とその生活の場である学校や地域を大切にする人間が育っていくと考える。

キーワード：「ひと・もの・こと」 構成活動 体験的な学び 共同的 対話

1. 研究の目的

社会でたくましく生きる個を育てるには、子どものところに多くの体験的な学びをし、様々な職種の魅力的なひとに出会い、感動して学ぶことが重要である。このような複合的な学びは、長期的に子どもの記憶に残り、これからの自己の生き方をより良い方向に導くと考える。体験的な学びや出会いの後、表現活動や構成活動を組み入れて振り返り、そこで感じ、考えたことは全体学習体験や出会いをただの体験で終わらせるのではなく、経験へと高めるための実践を研究していく。そうすることで、仲間と学びを深めていける子どもが育つのではないかと考える。

2. 研究の方法

2. 1. 学びを深める構成活動

子どもが地図やジオラマなどを作る構成活動を通して、学んだことを深めることができる。構成活動をする事自体に教育的価値があり、構成活動で作成したものを教室などに掲示しておくことでさらなる教育的価値が生まれる。

構成活動をすることで以下のような学びができるのではないかと考える。

- ① 構成活動を意識して学びを進めることで多面的な視点をもつことができる。
- ② 自分たちの学びを整理しながら振り返ることができる。
- ③ 構成活動で作成したものをを通して学んだ情報を共有できる。
- ④ 話し合う場面において、構成活動で作成したものは新たな視点を生み出せる支援となる。

2. 2. ひとり学習と全体学習の充実

3年生の社会科では、学んでいく対象が作業的・体験的な学習や問題解決学習を通して学べるような単元を設定した。そして、感じたことを中心にできるだけ具体的な「もの・こと」を大切にして、学び方を身につけるような学習の工夫を考えた。その中で、子どもの考えが多面的になり、より深く追究できるように「ひと」との出会いが重要だと考えた。「学び方を学ぶ」ために、発表、調べ方など、3年生の発達の段階に沿った指導をしていた。発表においては、他者意識を大切にし、他人に自分の考えを分かりやすく伝えることを第一にすることを徹底した。そのために調べてきた資料や自分の考えを整理させた。調べ方においては、インターネットや本だけに頼るのではなく、自分の目で見たり、実際にひとから話を聞いたりするなど自分の足で稼ぐことを第一とした。それにより、調べたことから何かを感じて自分の考えをもつことの大切さを伝えた。

そして、ひとり学習と全体学習が相互に関連しながら、さらに深めていくことが重要だと考える。ひとり学習を進めていく上で、子ども一人一人をしっかりみとり、評価することが大切になってくる。そして、その評価やみとりに基づいて、その個をどのように育てたいのかという明確な視点をもって、個に応じた指導をすることができる。それにより、主体的にひとり学習をするための支援をしていくことが重要である。個をしっかり理解することで、個が育っていく。全体学習において、調べ学習を通して蓄積してきた自分の考えを発信することで、考えを明確にすることができる。そして、友だちと話し合いを進める中で、自分の考えを見直したり、深化させたり、発展させたりしながら、お互いの共通点や相違点を探ることができる。

これにより、クラスみんなは課題を共有することができ、つまり、ひとり学習を充実することは、全体学習で自分の考えを修正、深化、発展させ、実感することができる。それにより、ひとり学習の必然性が明確になり、意欲的に調べ学習ができると考えている。また、自ら意欲的に課題を追究し、自分で新たな問題を発見し、問題解決の過程で友だちと学び合うことで自分を見つめ直し、自己の生き方をよりよいものになるようにつなげていける。

2. 3. 問い続け、学び続ける子どもの支援

何が起こるか分からない社会でたくましく生きる子どもに育っていくためには、問い続け、学び続けることが重要な要素である。子どもが問い続け、学び続けるためには、対象・他者・自己に触れて自分の内面から「問うこと」が発生する学びを経験していく必要がある。「問うこと」は、対象への新しい価値や自己の変容を実感するなどの学ぶ意欲を高める。子どもたちは、対象と出合うことによって、興味や疑問、こだわりなどが生まれ、もっと調べてみたい、確かめたい、繰り返しやってみようという気持ちになる。この一連の問題解決の過程には、知的な体験だけではなく情動的な体験や意欲的な体験も含まれる。学ぶ意欲が充実し、考え合い、探究し合うかわりから協同的な学びをすすめられる子どもたちのことである。子どもたちの学校生活をよりよいものにするためには、他者とのつながりを密にし、他者を受け入れ、互いを認め合う関係をつくるのが大切である。それは、子ども一人一人が自分なりの表現をすることが許容され、かつそれが受容されるような一人一人の居場所のある学級風土のことである。教師は授業における子どもの表情や発言、行動などから一瞬をとらえ、適切な働きかけを行わなければならないときがある。子どもたちが学んでいく過程で、一人一人のこだわりをみとり、子どもたちが学びを実感できるようにしていくことは教師の役割である。

3. 授業の実践

3. 1. 立体地図の活用

子どもたちは校区探検をしていく中で、学校のまわりのことをもっと知りたいと考えるようになった。それから、学校の周りにある建物の高さには大きな違いがあることに注目していたので、みんなで1枚の大きな立体地図を作りたいと考えるようになった。

子どもたちは立体地図作りを意識して校区探検を行った。立体地図を作成する目標があることによってそれまで以上に建物の高さや建物の種類、道の広さなど多面的な視点で校区探検を行うことができた。

また、立体地図を作成する時には、校区探検で描い

たメモを見ながら話し合いができた。そのことにより、グループで学びを想起することができた。(図1)また、できた立体地図をみんなで見ることで学んだことを共有することができた。

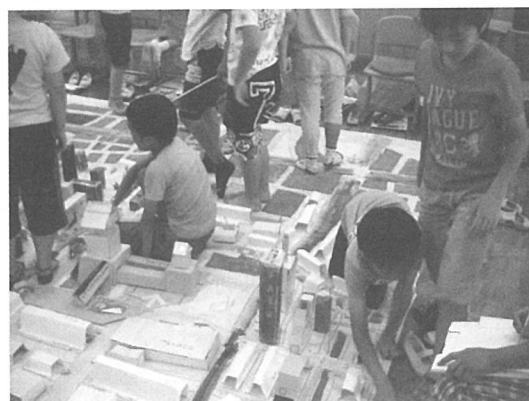


図1 立体地図を作成している様子

3. 2. 単元目標

- ・学校の周りの地域の様子について、特色ある地形、土地利用の様子、主な公共施設などの場所と働き、交通の様子、古くから残る建造物などの観察、調査したり、地図記号や四方位などを用いて絵地図にまとめたりして調べ、学校の周りの地域の様子は場所によって違いがあることを考えるようにする。

3. 3. 評価規準

(ア) 社会的事象への 関心・意欲・態度	①学校の周りの地域の様子について関心をもち、意欲的に考えている。 ②学校の周りの地域の特色やよさを考えようとしている。
(イ) 社会的な思考・ 判断・表現	①学校の周りの地域の様子について学習問題や予想、学習計画を考えノートに記述している。 ②土地利用の様子を地形的な条件や社会的な条件と関連付けたり、分布の様子を相互に比較したりして、学校の周りの様子は場所によって違いがあることに考え、分かりやすく説明している。
(ウ) 観察・資料活用 の技能	①観点に基づいて観察や聞き取り調査を行ったり、地図や写真などの資料を活用したりして、学校の周りの地域の様子について必要な情報を集め、読みとっている。 ②調べたことを方位を確かめ

	ながら白地図に記入し、主な地図記号や四方位などを用いて絵地図などにまとめている。
(エ) 社会的事象についての知識・理解	①学校の周りの地域の特色ある地形、土地利用の様子、主な公共施設などの場所と働き、交通の様子、古くから残る建造物の場所と様子などを理解している。 ②学校の周りの地域の様子は場所によって違いがあることを理解している。

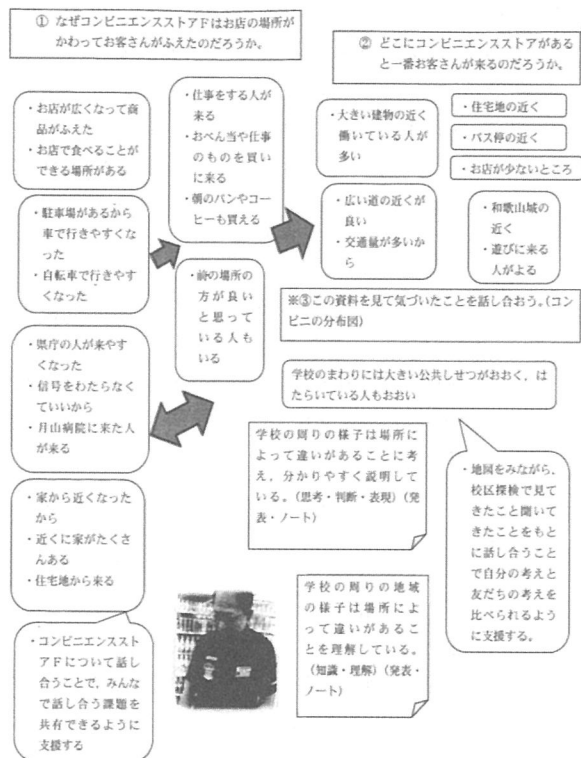
3. 4. 単元計画

全体学習	評価規準	ひとり学習
附属小学校のまわりのようす		
学校のまわりについて知ろう		
和歌山城の上から見てみよう 2時間	(ア) ①	・予備知識はほとんどなく、和歌山城の上から学校の周りの様子を見る。
和歌山城の上から気づいたこと、感じたことを話し合おう 1時間	(イ) ①	・学校の周りの東西南北にどのようなものがあるのか知る。
みんなで南方面を探検しよう 2時間	(イ) ① (ウ) ①	・校区探検ではどのような視点で学ぶのかを確認する。
グループで北方面を探検しよう 2時間		・通りによって建物種類や交通量が違うことなどを知る。
グループで西方面を探検しよう 2時間		
グループで東方面を探検しよう 2時間		
校区探検をして地図をかこう 4時間	(イ) ② (ウ) ②	校区探検の計画をたてよう 1時間
みんなで地図を完成させよう 2時間(園工)		・地図を作ることで校区探検を想起し、学校のまわりのそれぞれの特徴を知る
校区探検をして気づいたこと、感じたことを話し合おう 1時間	(ア) ② (エ) ①	
ファミリーマートを見学しよう 2時間	(イ) □	・店員さんと仲良くなってくるように指示する
みんなで追究する課題を決めよう 1時間	(ア) □	・お店でどのようなものが売られているのかを知る
コンビニエンスストアやその周辺を調査してみよう 2時間	(ア) ② (イ) ①	・お店の前の場所と今の場所の違いについて考える
なぜコンビニエンスストアはお店の場所がかわってお客さんがふえたのだろうか。 1時間	(イ) ② (エ) ②	本時の課題についてひとり学習をしよう 1時間

3. 5. 本時の目標

学校にまわりに大きい公共施設がたくさんあることを知る。

3. 6. 本時の展開



3. 7. 校区について学ぶ価値

子どもたちが生活している校区探検をすることは、子どもたちの知りたい・もっと学びたいという追究する意識を高めてくれる。また、子どもたちが自分たちの通う地域の様子に関心をもち、そこに暮らし、こだわりをもって、働く人々と直接的なかわりをもつ中で学び、自らの思いや願いを表現していく。そして、課題を追究し続ける主体的な活動が、地域について真剣に考え大切に思う心につながっていくと考える。こうした校区について学ぶ魅力を以下の3点で捉えた。

- 1 子どもたちにとって身近であり、親近感をもち、その中で生活することのよさを感じることができる。それにより地域を大切にする気持ちが高まり、地域の発展を願う気持ちを培うことができる。
- 2 直接体験を伴った見学や調査をすることが容易であり、様々な魅力的な人々と出会い、活きた資料や情報を収集するなど、インターネットや本だけでなく多様性をもって活用することができる。
- 3 自分の生活にとって切実感があり、体験を生かして考えて判断することができる。

これら3点が、校区を学ぶ魅力であり、これらの条件を満たす学習を1年間の学習の柱として計画した。

この学習を通して、地域に住む多くの魅力的なひとに出会わせることで、子どもたちは、課題に対して深く追究したり、多面的に考えたりすることができた。

3. 8. 本時の授業記録（一部抜粋）

こころ：コンビニはここだと良い。公園のちかくだと、おなかすいたとか、のどが渴いたとかあるの、お客さんも便利で来ると思いました。

みく：和歌山城の近くだったら、出てきたときにのどとかかわいたら、ジュースとかかったりして、買ったりできるからです。

たける：ここにあったら、ここにコンビニエンスストアKがあるし、コンビニエンスストアSもあるからなくていいと思う。

T：なくていいってことかな。

ゆうた：みくちゃんと場所はだいたい同じで、和歌山城とか観光しに来た人とかが帰るときに、飲み物とかかっていくから、そのコンビニがあったらいいと思います。

たける：質問。

こうた：りくと君も言ったように、和歌山城の近くには、コンビニエンスストアSKやFやSがあるじゃないですか。そこに建てるのはお店が多すぎ。上に売店とかあるし、水が、温度が乾いたとかだったら、上で買えばいいし、駐車場だから邪魔になるし。駐車場だし、だから、せまくなるし…。邪魔になるし、あまりいいと思いません。

あたる：理由は、病院とか県庁も近いからです。

4. 授業の考察

立体地図を教室の真ん中において話し合いをしたことで、子どもたちは課題に向かうことができた。

その理由として、立体地図が子どもの考えを視覚化する手立てとなっていたこととまた、友だちと自分の考えを比べて学びを深める支援となっていたことである。

構成活動したことで、子どもたちは校区についての知識・理解の面で同じ土俵に立って、考えを話し合うことができた。子どもの話し合いの中では、子どもが立地条件を考えながら立体地図を活用して、「なぜコンビニエンスストアFはお店の場所がかわってお客さんがふえたのだろうか。」「どこにコンビニエンスストアFがあるが一番お客さんが来るのだろうか。」という課題に対して、立体地図を指しながら話すことで、みんなにわかりやすく伝えることができるだけでなく、根拠としても活用できた。また、一人一人の考えを共有することもできた。（図2）

しかしながら、立体にしたことによって子どもが建物ばかりに注目してしまった。それにより、それぞれ

の道の役割について考えることがあまりできなかった。



図2 立体地図を見て話し合う様子

5. 成果と課題

成果

これまでに記してきたが、立体地図を作成することを意識して学びを進めることで校区について多面的な視点をもつことができた。また、自分たちの学びを整理しながら振り返ることができた。

話し合いにおいては立体地図という構成活動で作成したものを通して学んだ情報を共有できた。また話し合うことの場面において立体地図が新たな視点が生まれる支援となる。

それによって、単元を通して目標をもって学ぶことができた。

課題

今までに十分な構成活動を経験していなかった小学3年生で立体地図を作成することが難しいと感じた。各学年に応じた、段階的に構成活動の経験をしていくことが必要だと考える。

また、構成活動で作成したものが学びを深めていく上で非常に大きな影響力を与える。今回立体地図を作成したことで、建物の高さや大きさ、そして立地条件について考えを深めることができた。

しかし、逆に道の役割について深く考えることができなかった。そのため、構成活動で作成するものがどのような教育的価値があり、どのような考えを導き出すのか吟味する必要がある。

学校全体のカリキュラムや年間計画を含めて、どのような構成活動をしていくのかを研究していくべきだと考える。

参考文献

- (2011) 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 35
- (2012) 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 36
- (2013) 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 37
- (2014) 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 38
- (2015) 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 39
- (2016) 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 40